

2009年度

科目名	演習Ⅱ		
担当教員	高橋 圭一		
配当	日文4	コード	23300
開期	通年	講時	火曜日3限
		単位数	4
授業テーマ	戯作の翻刻と注釈。		
目的と概要	本学図書館が大量に所蔵する近世文学のマイクロフィルムの中から、未翻刻の黄表紙・合巻を選び出して翻刻し、適宜漢字をあて、注釈を施す。		
成績評価法	翻刻・注釈の出来具合が最重要であるが、平常点も加算する。		
テキスト	本学所蔵のマイクロフィルムを各自プリントアウトすること(一枚十円)。		
参考書	授業中、随時紹介する。『江戸語の辞典』(講談社学術文庫)は注釈の必需品、『くずし字用例辞典』(東京堂出版)は翻字の強い味方。		
履修に当たっての注意・助言	黄表紙を始めとする戯作をできるだけ多く読んで江戸語を知ることが、実は早く正しく翻字する近道である。		
講義計画			
<p>第1回 昨年度『江戸生艶気樺焼』を読み終えられなかったので、その続き。</p> <p>第2回 続き。読了。</p> <p>第3回 翻刻作品の選択とコピー(於図書館マイクロフィルム室)。</p> <p>第4回 もう一度。</p> <p>第5回 卒業研究作成に必要な工具書類の紹介(於図書館)。</p> <p>第6回 受講生による翻字の発表。たたき台は一名が作るが、全員で修正し、正しいものに近付ける。</p> <p>第7回 続き。</p> <p>第8回 続き。</p> <p>第9回 続き。翻字の終わった作品には直ちに漢字をあててゆく。これは翻字作業と並行して行う。</p> <p>第10回 続き。</p> <p>第11回 続き。</p> <p>第12回 続き。</p> <p>第13回 続き。</p> <p>第14回 続き。</p> <p>第15回 続き。</p> <p>第16回 漢字もあて終わった作品に、それぞれ担当者を決めて注釈を加えてゆく。出来上がった注釈は全員の前で、その報告をする。</p> <p>第17回 続き。</p> <p>第18回 続き。</p> <p>第19回 続き。</p> <p>第20回 続き。</p> <p>第21回 続き。</p> <p>第22回 続き。</p> <p>第23回 続き。</p> <p>第24回 続き。</p> <p>第25回 続き。</p> <p>第26回 受講生の進捗状況に合わせて個人指導を行う。高橋の個人研究室ではなく、これまで同様教室で行う。</p> <p>第27回 続き。</p> <p>第28回 続き。</p> <p>第29回 全員の翻刻・注釈の総括。合評。</p> <p>第30回 続き。</p>			